

関東地方の方言における格と文法関係

佐々木冠 (札幌学院大学)

【概要】

標準語の「に」と「の」は幅広い意味役割と文法関係に対応する。これらの格助詞が用いられる領域が複数の格助詞によって分割されている方言が関東地方には存在する。このような言語体系は斜格要素や連体修飾格における文法関係のコード化を考える上で興味深い材料を提供する。本発表では、千葉・茨城・埼玉に分布する方言の格体系の分析を通して意味的特定性と斜格性を区別する必要があることを明らかにする。

1. はじめに

『方言文法全国地図』に現れた関東の格助詞は、関東地方の伝統方言の実態を反映している側面と反映していない側面がある。第 6 図（酒を（飲む））と第 7 図（おれを（連れて行ってくれ））は、この地方の方言で直接目的語の格形式が 2 種類あることを正しく反映している。また、第 13 図（おれの（手拭い））などの連体修飾格に関する地図もこの地方で=ga が連体修飾格として用いられていることを反映するものとなっている。しかし、意味関係が所有関係以外のものがないため、意味関係による格助詞の使用制限は読み取れない。標準語の格助詞「に」に対応する形式を示す図（第 20 図：東京に（着いた）、第 24 図：ここに（ある）、第 25 図：おれに（貸せ）、第 27 図：犬に（追いかけられた））を見ると、方位・着点を表す形式として=sa が用いられる地域が広がっている点以外では関東地方の方言は標準語と変わらない体系に見える。間接目的語のマーカに関しては、南房総で=ge が使われていることが読み取れるだけである。

関東地方には、連体修飾格と斜格に関して標準語とは異なる文法関係と意味関係のコード化が現れる方言が存在する。このことは、『方言文法全国地図』からは読み取れない。この発表では、連体修飾格と斜格に焦点をあて、関東地方の方言における格のあり方について論じる。なお、スペースの都合上、例文は形態素の区切りは示すがグロスは付けない。形態素については必要に応じて解説する。関東地方には鼻濁音が存在する地域と存在しない地域がある。これらの地域に共通のガ行音を含む形態素については子音を<g>で代表させて示す。ただし、当該地域の例文を引用する際には<ŋ>と<g>のいずれかを用いることにする。

2. 主語と目的語の格標示

『方言文法全国地図』第 6 図、第 7 図からわかるように関東地方では、無生の目的語が無助詞で現れ、有生の目的語が格助詞=godo を伴って現れる方言が広く分布している。以下の例は、水海道方言の例で、茨城県内で広く見られるパターンである。

(1) ore=godo ture-de-Q-te kure(~kuro) (俺を連れて行ってくれ)

(2) tskue=Ø hadae-da (机を叩いた)

主語は自動詞文の主語でも他動詞文の主語でも無助詞で現れる場合が多い。

(3) are=Ø hadarae-de-ru (彼/彼女が働いている)

(4) ano jaro=Ø ore=godo buQkurasi-ta (あの野郎が俺を殴った)

主語と目的語の格標示を図式化すると次のようになる。

表 1. 主語と目的語の格形式

	有生	無生
主語	NP=Ø	NP=Ø
目的語	NP=Ø	NP=godo

このように有生の（言語によっては定の）目的語だけが有標の格標示をとる体系は通言語的に広く見られるものである。有標の目的語を示すマーカの機能は、主語として解釈される傾向にある有生、定、トピック性といった特徴を帯びた名詞句が目的語であることを明示することにあると Comrie (1979)は述べている。

関東地方における有標の目的語のマーカは形式名詞由来の格助詞=godo であることが多いが、利根川の河口には目的語のマーカとして=ba が用いられている地域がある。利根川河口地域である。目的語のマーカとして=ba を用いる方言は九州、沖縄、東北地方に分布しているが関東では珍しい。

利根川河口の=ba は、古典語の=oba が残存したものなのか、孤立発達したものなのか、あるいは人のつながりによって東北地方からもたらされたものなのか。筆者の調査に協力してくれた神栖市波崎（利根川河口の茨城側）の漁業関係者によれば、漁で岩手県沿岸の漁港に水揚げをするなど、三陸とのつながりがあるようである。地理的には孤立している利根川河口の=ba の起源について今後の研究が待たれるところである。

3. 斜格の細分化

関東地方の方言には、標準語の=ni が使われる領域で複数の格助詞が使い分けられている方言がある。そのような方言においても格女子=ni は用いられているが、3.1 から 3.3 に示す格助詞が用いられない意味領域で=ni が使われており、標準語比べると=ni の使用領域は小さい。

3.1. =sa

格助詞=sa は、方向を表す名詞句に附属する。なお、このような意味的特徴から茨城県内で用いられる=saは無生の「ゆきさき格」と呼ばれたこともある(宮島 1961)。方位格(allative)と見なすことは意味的特徴から妥当である。

(5) mitskedo=sa eN-be (水海道 (の中心部) に行こう)

格助詞=sa の起源が、大体その位置であるという意味を名詞に付与する要素である古典語の「さま」にあること、そして、格助詞=sa への変化については小林(2004)に詳しい。

茨城県内で用いられる=sa は、もっぱら無生名詞句に附属し、有生名詞句には附属しない。

(6)や(7)のように間接目的語 (意味役割としては受け手=有生の着点) は=ni または=ge でマークされる。ただし、(8)に示すように福島県に近い地域では=sa が間接目的語をマークする場合もある。

(6) ore=ni kur-e (俺にくれ) 水戸市

(7) ore=ge jokos-e (俺によこせ) 古河市

(8) ore={ni/sa} kur-e (俺にくれ) 北茨城市

有生性に関して制限がある点が東北地方の=sa と異なる点である。

格助詞=sa は(9)のように無生の参照点を表す用法を持つ。同じ意味役割を持つ有生名詞句は経験者格がある地域では、(10)のように経験者格で表される。(9)と(10)は水海道方言の例である。(10)に現れる=ɲanja は経験者格助詞=ɲani とトピックの助詞=wa が融合したものである。

(9) kono sjazu=wa sono hku=sa nia:-ne: (このシャツはその服に似合わない)

(10) ome=ɲanja kono hku=∅ nia:-ne: (お前にはこの服が似合わない)

茨城県内では、格助詞=sa が起点「親にもらった」、動作主「先生に教わった」、二次述語「医者になった」を表すことはない。これらの要素は=ni でマークされる。茨城県南西部および南部に関しては、「家にある」のような位置も=sa では表されず、=ni でマークされる。

3.2. =ge

与格格助詞=ge は千葉県(佐々木 1997)、茨城県南西部(佐々木 2004)、埼玉県(原田 1972)、栃木県(森下 1971)に分布する。鼻濁音がある地域では[ɲe]と発音され、鼻濁音がない地域では[ge]または[gɛa]と発音される。

与格助詞=ge の典型的用法は間接目的語の標示である。

(11) ome=ɲe kure-ru (お前にあげる)

(12) ano hjto=ɲe tjkuraQpo=∅ iQ-tsjAQ-ta (あの人に嘘を言ってしまった)

(13)のように受益者をマークすることもできる。

(13) maɲo=ɲe kore=∅ kose-da=N=da (孫のためにこれを作ったのだ)

移動動詞の有生の着点を表す用法もある。

(14) ozitjaN=ɲe naate=de kj-ta (お祖父さんに名宛てで来た)

(15) Nma=ɲe nor-u (馬に乗る)

接触動詞の有生の対象をマークすることもある。

(16) ano enu=ɲe sa:Q-to kuQtugare-Q-to (あの犬に触ると食いつかれるぞ)

(17)~(19)の着点や対象に無生名詞が対応する場合は、=sa が格助詞として用いられる。

- (17) ora-tj=sa dare=mo ki-ne: (俺の家に誰も来ない)
(18) baeku=sa noQ-te-N-be (バイクに乗っていこう)
(19) kore=sa sa:Q-tja dame=da (これに触ってはダメだ)

後述する=ганиが経験者という外項をマークするのに対し、=geは受け手や対象といった内項をマークする形式である。

格助詞=geの起源については、=saの場合に見られるような定説がない。この問題については、これまでに二つの説が提案されている。古典語の「がり」に起源を持つとする説(「がり」起源説:森下 1971)と所有格格助詞ガと方位格格助詞イ(〜エ)が融合したものであるとする説(複合格助詞起源説:井上 1984、佐々木 1997)である。発表者は、第三の説としてゲが所有格格助詞ガと「家」を表す名詞の組み合わせに起源を持つとする分析(所有格+「家」起源説)を提案している。

=geの起源について考える際、次の三つの事実を説明できる分析を提案する必要がある。三つの事実とは、(i) =geが有生名詞にだけ附属する格助詞であること、(ii) 音声的実現形として[ŋe][ge]以外に[gěa]があること、(iii) 「名詞+ge」が「〜の家」を表す方言が存在することである。

(i)のホスト名詞句の有生性に関する制限は、いずれの説でも説明が可能である。古典語の「がり」はそもそも人名詞にしか附属しない形式であったし、関東の所有格=gaは有生名詞に附属する格助詞である。=geの有生性に関する制限はこれらの要素の意味的制限を継承したものと見なすことができる。

一方、(ii)の音声的バリエーションは「がり」起源説では説明が困難である。ほとんどの地域で与格助詞の音声的実現は[ŋe]または[ge]だが、千葉県南房総市の内陸部では[gěa]と発音される。この地方では標準語の/ai/および/ae/に対応する音が[ěa]と発音される([oměa]「お前」、[ippěa]「いっぱい」)。一方、標準語の/e:/に対応する音はそのまま前舌半狭長母音で出現する([ge:ea]「芸者」)。[gěa]と[ŋe]は、複合格助詞起源説と所有格+「家」起源説では、/a/と後続する前舌母音(/i/または/e/)の融合によって音形の説明が可能である。一方、関東地方の方言で/i/の前の/r/の脱落が生産的ではないことから、「がり」起源説は独立した根拠付けのない音韻プロセスを想定せざるを得ない。この点で他の二つの説に比べて説得力がない。

(iii)に関して、最も説得力のある説明が可能なのは所有格+「家」起源説である。

/ge/が「家」を表す接尾辞として用いられる地域は茂原市萱場や水戸市全隈など与格助詞=geが用いられている地域の周辺に存在している。以下に示すように、与格助詞=geは、副助詞がホスト名詞句の間に入ることが可能であるのに対して、「家」を表す接尾辞-geの場合は、それが不可能である。これらの例から、「家」を表す接尾辞-geの独立性の弱さがわかる。

- (20) 常総市大生郷
a. ome=ŋe=dage kure-Q=kara (お前にだけ与えるから)
b. ome=dage=ŋe kure-Q=kara (お前だけに与えるから)

(21) 茂原市萱場

a. ora-ge=ni=dake ar-u takaramono (私の家にだけある宝物)

b. ora-ge=dake=ni ar-u takaramono (私の家だけにある宝物)

c. *ora=dake-ge=ni ar-u takaramono

所有格+「家」起源説では、与格助詞としての=ge は名詞/i(e)/が所有格と融合し「家」という具体的意味を失ったものと分析できる。「家」を表す要素が位置的な側置詞 (adposition: preposition, postposition) になる例は他の言語にも存在する (casa (Lat.) > chez (Fr.), Heine & Kuteva 2002)。また、接尾辞-ge は「家」という具体的意味を保持したまま、単語としての独立性を失ったものと見なすことができる。格助詞=ge の成立は、独立性の弱化に伴う具体的意味の喪失という文法化の一般的傾向に合致する。接尾辞-ge は「家」という具体的意味を保持している点では文法化の一般的傾向に合致しないが、あとで示す二つの説と異なり、逆の方向性を持っていないことは指摘しておきたい。

「がり」起源説と複合格助詞起源説は、「家」を表す接尾辞-ge の説明が困難である。

「がり」は万葉集では(22)のように名詞に直接附属する例しかないようであるが、徒然草には(23)のように先行する名詞との間に格助詞「の」が入る例がある。このことから、「がり」には単語としてのステータスがあったものと考えられる。「妹我理」も[[妹]_N[我理]_Nという複合語の構造を想定すべきと考えられる。

(22) ひろ橋を馬越しがねて心のみ妹我理遣りてわは此処にして (万葉集, 3538)

(23) 人のがりいふべき事ありて (徒然草, 31 段)

(人のもとに言うべきことがあって)

[[Hito=no]_{NP} [gari]_N]_{NP}

単語としてのステータスを持っていた時点で「～のもと」といった相対的な意味しか持たなかった要素が独立性を失って接尾辞になる際に具体的な意味を獲得したとすれば、文法化の一般的な傾向の逆になる。具体的な意味の獲得は、独立性の低い要素が独立性を獲得する脱文法化 (degrammaticization) に伴う現象である。英語の接尾辞-ist は単語として使われる際には、communist を意味する。

同様の意味的困難は、複合格助詞起源説にも存在する。助詞は独立性において単語と接辞の間に位置する文法的要素である。ここでも独立性を失って助詞が接辞になる際に「家」という具体的意味を獲得したことを想定しなければならない点で文法化の一般的な傾向の逆の現象を想定せざるを得ない。

3.3. =gani

経験者格=gani には状態文の斜格主語をマークする用法と形容詞文の参照点をマークする用法がある。主語が経験者格でマークされる状態文には「わかる」「困る」といった非派生的な心理述語を述部に持つものと、可能構文や難易文そしてある種の人魚構文といった派生的

構文がある。鼻濁音がある地域では音声的には[ɲani]で実現し、鼻濁音がない地域(千葉県内)では[gani]で実現する。(24)から(29)は水海道方言からの例文である。

非派生的構文

(24) are=ɲanja ome=godo wagaN-me (彼/彼女にはお前がわからないだろう)

(25) ore=ɲani=mo komaQ-pe=na (俺も困るだろうな)

なお、「困る」の対象が出現するときは主語が主格になる。

(26) ore={Ø/*ɲani}=mo so:oN=ni komaQ-te-ru (俺も騒音に困っている)

派生的構文

(27) ome=ɲani nego=godo nade-rare-Q=ka (お前は猫をなでられるか、可能構文)

(28) kono hoN=Ø kodomo=ɲani jom-i nigu-e (この本は子供に読みにくい、難易文)

(29) ore=ɲani se:ta:=Ø ki-ru=jo:=da ((寒いので) 俺にとってはセーターを着るようだ、
人魚構文)

形容詞文の参照点を表す用法については、3.1の(10)を参照。

経験者格助詞=gani は所有格助詞=ga と位格助詞=ni を組み合わせた形式になっている。所有格助詞と経験者格助詞はホストの有生性に関する制限が同じである。所有格助詞=ga はもっぱら有生名詞句に附属する。経験者格助詞=gani ももっぱら有生名詞句に附属する。

所有格助詞と位格助詞が組み合わされて経験者格助詞を形成した動機付けは明らかではない。意味的な動機付けと統語的な動機付けが考えられる。

経験者格助詞でマークされる名詞句は能力(可能構文)や感情(心理述語文、人魚構文)の持ち主である。所有者を有生の位置とみなす分析が様々な文脈で提案されている(Benveniste 1960, Bach 1967, Freeze 1992)。所有格助詞と位格助詞の組み合わせにより「有生の場所」を明示することが経験者格助詞が成立した意味的なモチーフだった可能性がある。

所有格と位格の両方でマークされる統語的なモチーフは一見すると見当たらない。出現する構文の他動性の低さから、位格という斜格が主語に用いられることは予想できるが、所有格という連体修飾構造に典型的な格が付与される動機付けは、接尾辞を使った可能構文や心理述語文では見だしにくい。しかし、述部が以下の例のように「動詞終止・連体形+こと+でき」という構成の可能構文であれば、補助動詞「でき」に先行する部分が名詞的な要素なので、これが所有格を主語に付与することはあり得るだろう。

(30) 塩鮭位(しほびきぐれえ)は買あことも出来らな(『土』p.31)

名詞的な要素による所有格の付与は(29)に示した人魚構文でも可能と思われる。形式名詞=jo は名詞的な要素であり、所有格を主語に付与することは可能と思われる。もともと、人魚構文は統語的には単一節的な構文なので、共時的説明としては無理があるかもしれない。

経験者格名詞句は以下の例文が示すように、いくつかの主語特性を呈する。

(31) 再帰代名詞の先行詞

are_i=ɲanja zibuN_i=no megada=Ø wagaN-me (彼/彼女には自分の体重がわからないだろう)

(32) 受動文の位格名詞句に対応（経験者格から位格への「降格」）

ome={ni/*ŋani} wagar-are-de tamaQ-ka（お前にわかられてたまるか）

経験者格助詞=gani が用いられている地域は、千葉県、茨城県南西部、埼玉県東部であり、与格助詞=ge に比べると使われている地域が狭い。

3.4. 格のゆれ

佐々木・カルヤヌ(1999)によると、水海道方言では構文によって=sa、=ge、=gani の使用のゆれが認められるという。

三つの格助詞の使い分けがはっきりしている構文は次の通りである。授受動詞文や使役構文と行った間接目的語（使役構文の場合は与格被使役者）が現れる構文では、=ge がもっぱら用いられる。移動動詞文の斜格補部は、もっぱら=sa でマークされる。可能構文や心理述語文の主語は、もっぱら=gani でマークされる。これらは、間接目的語、着点、斜格主語というそれぞれの格助詞にとって中心的な用法である。

三つの格助詞の間でゆれが見られるのは、それぞれの格助詞の中心的用法からずれた用法である。=ge と=sa のゆれが見られるのは、「乗る」や「触る」を述部にする構文である。

(33) a. Nma=ŋe nor-u（馬に乗る）

b. Nma=sa nor-u（＼）

(34) a. enu=ŋe sa:N-na（犬に触るな）

b. enu=sa sa:N-na（犬に触るな）

ただし、無生物名詞の場合にはこのようなゆれが見られない。

(35) a. basu=sa nor-u（バスに乗る）

b. *basu=ŋe nor-u（＼）

経験者格と与格でゆれがみられるのは描写の基準を表す構造である。

(36) a. tosijori=ŋe sami:。（年寄りに寒い）

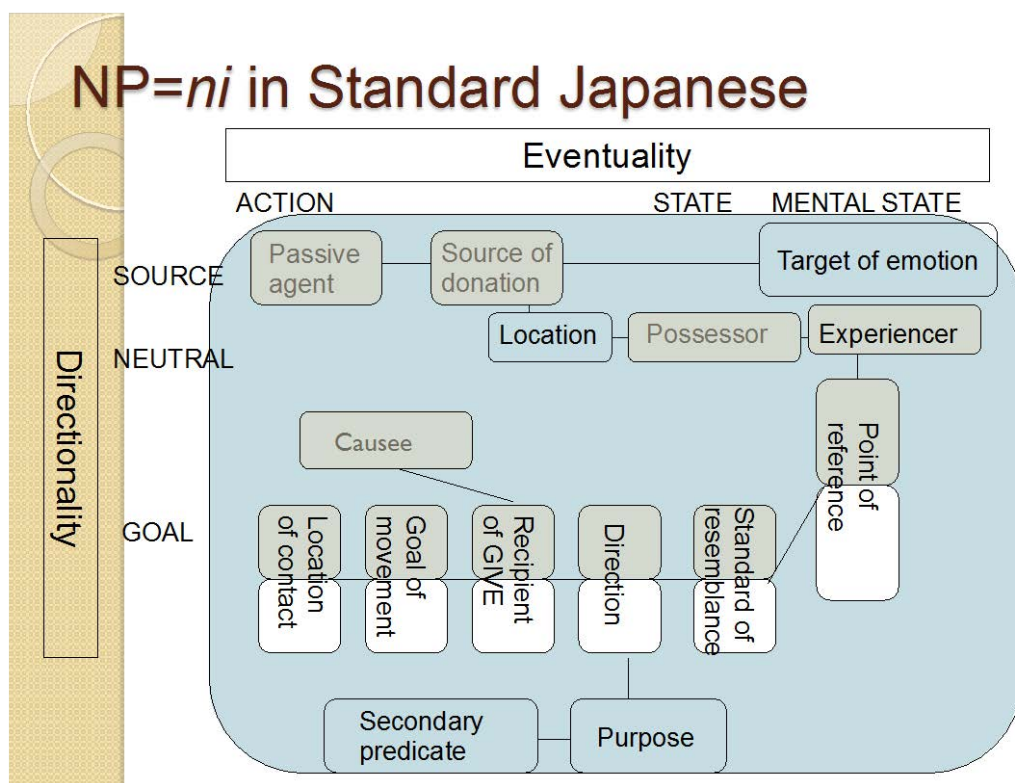
b. tosijori=ŋani sami:。（＼）

3.6. =ni の分断（Sasaki & Caluianu 2009）

これまで示してきた=sa、=ge、=gani はいずれも文法化などのプロセスによって新しく生じた格助詞である。これに対して、=ni は、上代日本語から存在する格助詞である。格助詞=ni は、標準語の影響がない発話でもこの地域で用いられる。ただし、用いられる範囲は標準語のそれとは異なる。

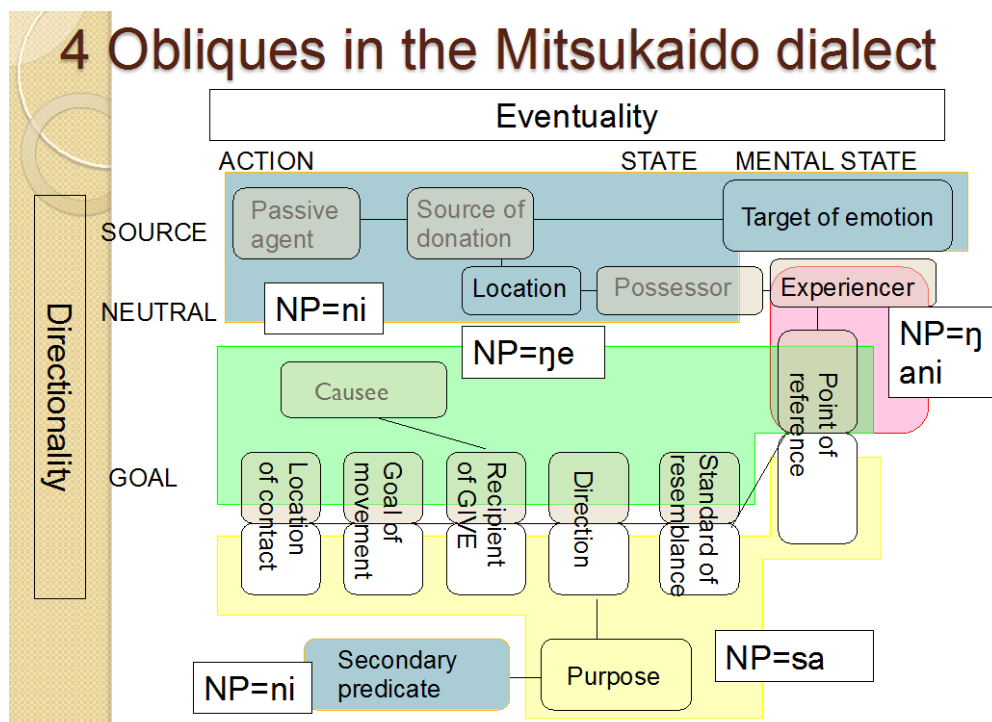
標準語の=ni は用法の広い格助詞である。しかし、各用法が意味的に隣接しており、図 1 に示すような意味地図で捉えるならば、家族的類縁（family resemblance）で用法を意味的に定義することができる。

図 1. 標準語の「に」の意味地図 (Sasaki & Caluianu 2009 より)



水海道方言で=ni が用いられるのは、二次述語 (esja=ni nar-u (医者になる))、起点 (oja=ni moraQ-ta (親にもらった))、動作主 (ziNsa=ni tskamaQ-ta (巡査に捕まった)) に限られている。

図 2. 水海道方言の斜格の意味地図 (Sasaki & Caluianu 2009 より)



水海道方言（あるいは類似した体系を持つ近隣の方言）の場合、=ni の用法が意味地図上で、他の格助詞により分断されているため、=ni の性質を意味的に定義しがたい。

水海道方言では、=ni は「他の斜格助詞が用いられない場合に使われる斜格助詞」というかたちでしか用法を定義できない。複数の斜格助詞が出現したことにより、古くからある=ni が意味的に限定が難しい斜格助詞になっているのである。

斜格であることと意味的特定性が密接に結びついている文法理論がある。斜格であることを[-o, +r] (目的語性がなく、意味的特定性がある) と定義する語彙機能文法 (Bresnan & Kanerva 1989) はまさにそのような言語理論である。意味的に限定が難しい斜格の存在は、斜格であることと意味的特定性の結びつきを相対化するものと考えられる。

3.7. 斜格における文法関係のコード化

標準語では、直接格において主語と目的語が形式所区別されているが、斜格においては主語（斜格主語）と目的語（間接目的語）が同じ格形式（NP=ni）で現れる。これに対し、標準語の=ni の使用域に複数の斜格助詞が生まれた関東の方言では、斜格においても主語と目的語が形式上区別される体系が生じている。ただし、4 項対立型の文法関係のコード化は、有生名詞句に限られる。

表 2. 標準語の文法関係のコード化

	主語	目的語
直接格	NP=ga	NP=o
斜格	NP=ni	

表 3. 水海道方言の文法関係のコード化

	有生名詞		無生名詞	
	主語	目的語	主語	目的語
直接格	NP=∅	NP=godo	NP=∅	
斜格	NP=ɲani	NP=ɲe	NP=sa	

表 4. 北茨城市磯原方言の文法関係のコード化

	有生名詞		無生名詞	
	主語	目的語	主語	目的語
直接格	NP=∅	NP=koto	NP=∅	
斜格	NP=ni	NP=sa	NP=sa	

斜格において文法関係の区別が形式的に明示されることにより、4 項対立型の体系では、標準語では見えて来にくい文法構造が可視化されることがある。

標準語では、使役文や希求構文といった二重節的構文で、補文の主語に対応する与格名詞句の統語的位置づけに関して、二つの分析が存在する。補文の斜格主語と見なす分析 (Harada

1977, Takezawa 1987) と主節の斜格補部と見なす分析 (Nakau 1973, Matsumoto 1996) である。

(37) 補文の斜格主語

[私_iは [彼_jに 自分_{ij}の服を ara(w)]_s-ase-ta]_s

[私は [彼に わかって]_s ほしい]_s

(38) 主節の斜格補部

[私_iは 彼_jに [[]_j] 自分_{ij}の服を ara(w)]_s-ase-ta]_s

[私は 彼_iに [[]_i] わかって]_s ほしい]_s

標準語でも、否定極性表現の分布などから、NP=**ni** を主節の斜格補部と見なすべきだとする分析がある (Muraki 1979)。これに対して、水海道方言では格形式だけでも Muraki と同様の分析が適切であることを示すことができる。

水海道方言では、使役構文の被使役者は NP=**ne** にはなるが、NP=**nani** にはならない。これは被使役者を主節の補部として捉える分析では捉えることができる。一方、補文の主語と見なす分析では NP=**nani** にならないことを説明できない。また、希求構文 (述部は動詞のテ形 + morae-de:だが) でも同様のことが言える。希求構文では、被希求者が与格をとらない場合、補文の述部が斜格主語をとる動詞の場合 NP=**nani** の形式をとるが、否定極性表現の分布を見る限り、以下に示すように、与格の被希求者は主節の補部であるのに対して、経験者格の被希求者は主節の斜格主語と見なすことができる。

(39) a. ora dare=**ne**=mo wagaQ-te morae-daga-**ne**.

b. *ora dare=**ne**=mo wagaN-**ne**-de morae-de.

c. ora dare=**nani**=mo wagaQ-te morae-daga-**ne**.

d. ora dare=**nani**=mo wagaN-**ne**-de morae-de.

経験者格名詞句に現れる否定極性表現は、補文の述部に現れる否定接尾辞によっても主節の述部に現れる否定接尾辞によっても認可されるが、与格名詞句に現れる否定極性表現は主節の述部に現れる否定接尾辞によってしか認可されない。

4. 連体修飾格

標準語では、[[...]_{NP} N]_{NP} の構造で修飾名詞句をマークする格助詞は=**no** だけである。一方、関東地方の方言では『方言文法全国地図』第 13 図から明らか内容に=**ga** が用いられている地域が広がっている。しかし、=**ga** が単純に標準語の=**no** の対応物であるわけではない。=**ga** が用いられている地域でも=**no** は用いられている。こうした方言では複数の連体修飾格助詞が使い分けられているのである。

4.1. 所有格=**ga** の使用範囲

所有格助詞=**ga** は、後述する=**no** と異なり、意味的に用法を規定できる格助詞である。

所有格助詞=**ga** は有生名詞に附属する。人称代名詞に最も附属しやすく、生物でも植物に

は附属しにくい。

(40) ore= η a mono (俺のもの)

(41) nego= η a siQpo (猫の尻尾)

(42) de:go={no/* η a} ha (大根の葉)

=ga は名詞句内の意味関係にも用法を規定される。分離可能か否かにかかわらず、所有関係を表す場合は= η a を用いることができる。

(43) are= η a me=wa ao-e (彼/彼女の目は青い)

(44) ore= η a hku (俺の服)

身体部分であっても材料の解釈がある場合は、= η a ではなく=no を用いる。

(45) usi= η a siQpo (牛の尻尾)

(46) usi={no/* η a} nigu (牛の肉)

(47) kjtsune= η a siQpo (狐の尻尾)

(48) kjtsune={no/* η a} erimagi (狐の襟巻き)

所有以外の関係でも「対象—出来事」「経験者—経験」「受益者—対象」「動作主—動作」「親族関係」「時間関係」「場所関係」を表す場合には所有格助詞を使うことができる。

(49) ka:tjaN= η a zjaNbo (母の葬式)

(50) ore= η a konomi (俺の好み)

(51) kodomo= η a hoN (子供向けの本)

(52) ore= η a tanomi (俺の頼み)

(53) se η are= η a jome (息子の嫁)

(54) ore= η a koro (俺の頃)

(55) ore= η a mae(~me:) (俺の前)

同格や部分格の関係の場合には所有格助詞を用いることができず、=no を用いる。

(56) se:ziga={no/* η a} kjsiro: (政治家の喜四郎)

(57) siriae={no/* η a} ezibu (知り合いの一部)

佐々木・カルヤヌ(1997)は、Nikiforidou (1991)提唱の所有を中心とする意味関係のネットワークを用い水海道方言における所有格の使用範囲を分析した。そして、所有格助詞を用いることができる意味関係が所有関係から直接派生可能な意味関係に限定されていることを明らかにした。

4.2. 場所格連体= η a

場所格連体の= η a は、以下の例に示すように相対的な場所を表す名詞句に附属し、場所関係を表す。

(58) me:= η a mono (前にあるもの)

地名や具体的な場所を表す名詞には= η a が附属しない。

(59) tskuba={no/*na} bjo:eN (つくばにある病院)

(60) jama={no/*na} kuri (平地林の栗)

連体修飾構造に現れる=na は、学校文法でいうところの形容動詞の連体形と同形である。しかし、名詞句と場所格連体の組み合わせと形容名詞と=na の組み合わせは、文法的な振る舞いが異なる。名 sh くと場所格連体の=na の組み合わせは、所有格助詞を伴った名詞句と同様にゼロ代名詞を修飾することができるが、形容名詞と=na の組み合わせの場合には不可能である。

(61) [ore=ŋa {mono/∅}]_{NP}=da (俺のものだ)

(62) [me:=na {mono/∅}]_{NP} toQ-te (前にあるものにとって)

(63) [kire:=na={no/*∅}]_{NP} ture-de kj-ta (きれいなのを連れてきた)

4.3. 連体修飾構造の文法格としての属格=no

属格助詞=no は、所有格助詞=ŋa および場所格連体の助詞=na が用いられない連体修飾構造で用いられる。(46)や(48)に示したように有生名詞に附属することもあるし、(60)に示したように場所名詞に附属する場合もある。意味的にも所有から離れた意味関係だけでなく、以下の例のように所有から直接派生可能な意味関係である全体一部分関係を表すこともできる。

(64) tskue=no asi (机の脚)

属格助詞=no は意味的に用法を規定できない。それが現れる構造が連体修飾構造であることを示すだけの格助詞である。水海道方言の属格は連体修飾構造における文法格と見なすことができる。

連体修飾構造において修飾名詞に斜格助詞が附属する際、そのままのかたちでは被修飾名詞を修飾できず、斜格助詞のあとに属格助詞が後続する構造をとる。

(65) maŋo=ŋe=no mijaje (孫へのみやげ)

(66) egi=e=no mizi (駅への道)

(67) maŋo=gara=no tenjami (孫からの手紙)

ここでは属格が斜格名詞句と被修飾名詞の修飾関係の仲立ちをしている。ここでも属格はそれが現れる構造が連体修飾構造であることを明示する機能を果たしている。

属格に関してもう一つ注意したいのは、(56)のような同格の関係を表すために用いられる点である。このような構造で用いられる=no はコンピュータの連体形として分析されることがある(奥津 1978 など)。東北地方には、以下に示すように、=no ではなくコンピュータの終止形が用いられる方言がある。

(68) 由利本荘市本荘方言 (日高 2014: 51)

学生だ人 (学生である人)

関東地方には、(68)のように名詞句内の同格関係を表すためにコンピュータの終止形が用いられる方言はない。

複数の連体修飾格助詞が使い分けられている点で関東地方には標準語とは異なる特徴を示す方言がある。しかし、コンピュータと連体修飾格助詞の棲み分けに関しては、関東地方の方言は標準語と同様と言える。

5. 態

態は関係を持っている名詞句の文法的ステータスを変える動詞の形態法 (Klaiman 1991) と定義される。態はその定義において格と関係の深い文法カテゴリーである。

接尾辞による態に限定した場合、関東地方の方言の態は栃木県に生産的な自発がある以外は標準語のそれと基本的に同じである。接尾辞による態は、受動、使役、可能の 3 種類である。

可能態であることは東北地方の方言と対照する際に重要なポイントである。東北地方の方言では、*-e*, *-rare* の他に自発の *-rar* または *-rasar* を使って可能を表したり、「動詞の終止・連体形(=ni) ii」といった英語の *be good at ...* に対応する迂言的表現を使って可能を表す。これらの可能表現では主語が斜格化しない傾向にある (例外: 山形市方言、森山・渋谷 1988)。

一方、関東の東北方言と呼ばれる茨城の方言では、接尾辞 *-e/-rare* を使った可能構文で主語が斜格化するだけでなく、地域によっては、それ固有の斜格形式 (経験者格) が存在する場合がある。

態を接尾辞によるものだけでなく複合述語を述部に持つものに拡大した場合、受益構文や希求構文のような標準語にもある態も関東地方の方言には存在する。一方、「動詞の終止・連体形=*jo:=da*」を述部とする人魚構文のように、標準語では主語の形式が変わらないため態と見なすことができないが、関東地方の方言の中には主語の格形式が変わるため態と見ることができる場合がある。

可能もモダリティと関係するカテゴリーであり、関東の方言では同時に態としての性質をもっている。ある種の人魚構文もまたモダリティと態の両方にまたがる性質を持っているといえる。

5. 方言文法調査票に関する提案

関東地方の方言の格を考える上で重要な特徴は斜格主語固有の格形式が存在することである。与格 (間接目的語を表す格) が存在する言語体系は珍しくない。Silverstein (1993) は主格と与格の対立こそが最も基本的な格の対立であると述べている。一方、斜格主語固有の格形式が存在する言語は極めてまれである。能格型言語では情動格 (*affected case*) のあるゴドベリ語やアンディ語といったコーカサスの言語が知られている (Kibrik 1996)。対格型言語の場合、千葉、茨城、埼玉の 3 県の方言以外には管見の及ぶ限り存在しない。

斜格主語を調べるための調査項目が全国的な方言調査の調査票に含まれることはなかった。『方言文法全国地図』の調査項目にも斜格主語を調べるための項目はないし、昨年まで実施

されてきた国立国語研究所の共同研究プロジェクト「全国方言分布調査 (FPJD)」の調査票にもない。

斜格主語を考慮に入れた調査票を作る必要があるのではないだろうか。これは、斜格主語固有の形式がある方言の分布を明らかにするのに役立つだけでなく、方言ごとの態のあり方を知る上でも役立つと思われる。前述のように可能は全ての方言で態としての性質を持っているわけではない。

これまで行われてきた全国規模の方言調査でも、可能構文は調査項目にすでに存在している。それにも関わらず、斜格主語に関する情報が調査結果から得られないのは、述部だけ記録する（あるいは公表データに反映させる）かたちになっているからである。文全体を記録すれば、斜格主語構文の地域差を明らかにできる。斜格主語固有の格形式が存在する方言は関東地方の一部（とはいえ広い地域だが）に限られているかもしれない。しかし、可能構文で主語の斜格化が起きるか否かは全国的な地域差がある可能性が高い。

標準語以上の細かい区別（格、アスペクト）だけでなく、標準語にある構造の欠落も重要な地域差である。このような側面を含めて日本語の地域差を把握する上で斜格主語を調べることができる項目を調査票に入れることは有益だと考えられる。

参照文献

- 井上史雄 (1984) 「埼玉県の方言」『講座方言学 5 関東地方の方言』飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編、169-202. 国書刊行会.
- 奥津敬一郎(1978)『ボクハウナギダの文法』くろしお出版.
- 小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房.
- 佐々木冠(2004)『水海道方言における格と文法関係』くろしお出版.
- 佐々木冠・ダニエラ・カルヤヌ (1997) 「水海道方言の連体修飾格」『言語研究』111. 59-83.
- 佐々木冠・ダニエラ・カルヤヌ(1999)「水海道方言の4つの斜格」『一般言語学論叢』2. 5-40.
- 佐々木英樹 (1997) 「総論」『千葉県のことば』平山輝男編, 1-38. 明治書院.
- 原田伊佐男(1972)『埼玉県東南部方言の記述的研究』早稲田大学修士論文.(1996 年改訂版).
- 日高水穂(2014)「秋田県由利本荘市本荘方言」『全国方言文法辞典資料集(2) 活用体系』方言文法研究会編. 45-52. 2009-2013 年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)「日本語諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』の作成とウェブ版の構築」(課題番号: 21320086・研究代表者: 日高水穂) 研究成果報告書.
- 宮島達夫(1961)「方言の実態と共通語化の問題点 6 福島・茨城・栃木」『方言学講座第 2 巻 東部方言』東条操編. 236-263. 東京堂出版.
- 森下喜一 (1971) 「方言にあらわれる格助詞「げ」について」『野州国文学』7: 21-35.
- 森山卓郎・渋谷勝己 (1988) 「いわゆる自発について: 山形方言を中心に」『国語学』152. 47-59.
- Bach, Emmon (1967) Have and be in English syntax. *Language* 43. 462-485.

- Benveniste, Emile (1960) 'Être' et 'avoir' dans leurs fonctions linguistiques. *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris*. 55(1). 113-134.
- Comrie, Bernard (1979) Definite and animate direct objects: a natural class. *Linguistica Silesiana* 3. 13-21.
- Freeze, Ray (1992) Existentials and other locatives. *Language* 68. 553-595.
- Harada, Shin-Ichi (1977) The derivation of unlike-subject desiratives in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 10. 131-46.
- Heine, Bernd & Tania Kuteva (2002) *World Lexicon of Grammaticalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kibrik, Alexandr (1996) *Godoberi*. München: LINCOM EUROPA.
- Klaiman, M.H. (1991) *Grammatical Voice*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsumoto, Yo (1996) *Complex Predicates in Japanese*. Stanford: CSLI Publications.
- Muraki, Masatake (1978) The *sika nai* construction and predicate restructuring. In: John Hinds & Irwin Howard (eds.), *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. 155-77. Tokyo: Kaitakusha.
- Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.
- Nikiforidou, Kiki (1991) The meanings of the genitive: a case study in semantic structure and semantic change. *Cognitive Linguistics* 2-2. 149-207.
- Sasaki, Kan & Daniela Caluianu (2009) The rise of a semantically unrestricted oblique case in the Mitsukaido dialect of Japanese. Paper presented at the conference "Case in and across languages" (Tieteiden talo, Helsinki).
- Silverstein, Michael (1993) On nominatives and datives: universal grammar from the bottom up. In: Robert D. Van Valin (ed.), *Advances in Role and Reference Grammar*. 465-98. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case Marking in Japanese*. Doctoral dissertation. University of Washington, Seattle.